

指導のマンネリ化と、 明るい声と暖かい応えに学ぶ

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

育てる会では生活の場を二つに設けている。

一つは山村留学センターでの生活と、もう一つは農家での生活である。この生活方式を五十年間続けてきた。

長い年月の間に、指導者たちも、参加する子供たちも、そして、保護者たちも、世代の交代を繰り返してきた。

それにつれ、センターでの集団生活も農家での生活も、以前の通り、前年の通りに、大きな事件がなければ「それでよし」、という安心感が漂うようになってきた。このことは「模倣の繰り返し」の上に安住していることである。

センターにおける集団生活の場で、指導者はこの模倣の繰り返しにより、「子供は皆、こうするのが当たり前」という指導基準を持ち、その基準から子供たちへの注意の言葉

を発するようになる。

この傾向は人の情であり、無理もない事とも思える。

本当は、子供の生い立ちや、個性特性により注意の言葉は異なるはずであるが……。

子供たちは異年齢構成の小集団となって農家生活に移る。

指導者の頭の中では、農家で互いに助け合う子供像や、素直に農家の言うことを聞いて生活する子供像を思い描き、それを基準に、農家巡回をする。そして、この基準から子供たちに注意の言葉を発する。

これも、模倣の繰り返しに安住した指導と言えよう。

しかし、本当は子供たちの農家での生活の容態は、生い立ちや、個性により皆違うはずなのであるが……。

センターでの集団生活の場合も、農家生活の場合でも、長い間、同じことを繰り返ししていると、どうしても、模倣の上に安住するような指導になってしまうものである。

実は、このことは、若い指導者たちに言うのではなく、指導者である私自身に最も問いかけてはならぬ事ではなかったか、と気が付いた次第である。

この気づきの発端は農家からの手紙であった。

その手紙には集団生活や体験活動のあり方、農家生活の意義などについて、質問や意見が面々とつづられていた。

私は手紙につづられている文言の一つひとつを噛みしめながら読み進めるうちに、そ

の手紙は山村留学の原点を問いかけていたのではないかと思った。

模倣の繰り返しの上に安住した指導体制に、大きな揺さぶりがかけられる思いであった。

私は山村留学を始めた頃の農家の声を思い出した。

「育てる会で、生活の仕方や活動の目的を一人ひとりの子供に、しっかりつかませてからおれたち農家へ送り出してくれ。そうしたら、俺たち農家は一人ひとりの子供の面倒をしっかりと見てやり、絶対にいい子供にして返してやるから」と言ったことを。

この農家の言葉といい、農家の手紙といい、教育を生業なりわいとはしていない人たちの言葉に、子育てに寄せる真剣さと真実さを感じた。

私はこの際、自分たちの狭い世界にばかりに安住せず、広く目を開いて、一般社会で行われている様々な教育にかかわる場面を見つめる必要があると感じた。そこでは、子供たちにどのような働きかけをしているのか知る必要があると感じた。

こんな思いに至った時、かつて山村留学生であり、今は、児童養護施設で子供の世話をしているN君のことを思い出した。

「そうだ、彼を訪ねてみよう。そこで、子供たちがどのように暮らし、指導者は子供とどのように接しているか、見てみよう」と思った。

それは横浜の山手町にある児童養護施設・聖母愛児園である。

坂を上り詰めた高級住宅地の中に、立派な門構えをもつ施設であった。正直なところ、

養護児童たちはこんな立派な施設に暮らしているのか、といささかの驚きであった。

N君は施設の細部まで案内してくれた。

特に私が感動したことは、広い敷地の各所に、それぞれ独立した生活の場所が設けられていることだ。そこには一軒の家の設備がすべて揃えられており、そこで、世話をしてくれる指導者と共に、異年齢の子供数人が、家族のように暮らしている。つまり温かい家庭の雰囲気を経験させるというのだ。私は、山村留学での農家の暮らしを思った。

N君が言うには、子供たち全員が集まるときは、近所の人たちを招待してのバザーの時とか、また町の祭りの日には、地域に向いて太鼓、民舞の演奏を披露するときなどであるとのこと。私は山村留学での収穫祭を思った。

聖母愛児園の子供と地域の子供は、互いに家庭を訪問し合っているという。また養護施設と地域とは親しく付き合っているとのこと。

私は、児童養護施設では、一人ひとりの子供の生い立ちや育った環境を知り、その上に立って指導をしていることを知り感動を覚えた。集団指導ではなくて、個別指導に徹しているのだと思った。

下校してきた子供の「ただいまー」と言う明るい声と、それに応える「おかえりなさい」と言う、施設の人々の温かい言葉のやりとりを聞いて、私は施設を去った。